

### 345 上皮性卵巣癌に対するp53遺伝子導入とCDDPとの併用効果

鳥取大

鳥田宗昭, 佐藤慎也, 鎌沢俊二, 高橋正国,  
大石徹郎, 皆川幸久, 紀川純三, 寺川直樹

【目的】p53遺伝子欠損上皮性卵巣癌に対するp53遺伝子導入とCDDPとの併用効果を知ること。

【方法】p53遺伝子完全欠損の上皮性卵巣癌SK-OV-3細胞をSCIDマウス大腿部に移植し, 研究対象とした。正常p53遺伝子を組み込んだアデノウイルスベクター(AxCAP53)を作製した。p53遺伝子単独導入(A群), CDDP単独投与(B群), p53遺伝子とCDDPとの併用(C群)の3群(各群n=5)を設定し, 腫瘍の増殖抑制率を比較した。CDDPは1.5mg/kgを腹腔内に投与し, AxCAP53は $1 \times 10^9$  PFUを腫瘍内に局注した。その後, 腫瘍を摘出してTUNEL法とPCNA染色を行い, Apoptotic indexおよびPCNA陽性細胞比率を算出した。

【成績】移植卵巣癌モデルにおける治療開始14日後の腫瘍増殖抑制率は, A群で18.4%, B群で15.9%, C群で42.3%であり, p53遺伝子とCDDPとの併用群で有意に高かった。Apoptotic indexは, A群で16.4%, B群で24.3%, C群で46.8%であり, 併用群で高率であった。一方, PCNA陽性細胞比率は各群ともに40%程度であり, 差を認めなかった。

【結論】p53遺伝子欠損卵巣癌モデルにおいて, p53遺伝子導入とCDDPとの併用による腫瘍の増殖抑制効果が明らかとなった。

### 346 上皮性卵巣癌の初回治療時におけるCA125の推移と予後 -対数値を用いた検討-

神奈川県立がんセンター

加藤久盛, 松下径広, 宮城悦子, 小野瀬 亮,  
中山裕樹

【目的】臨床実地において上皮性卵巣癌の治療効果判定に腫瘍マーカーとして使用しているCA125ではあるが, 測定値の推移, 特に初回治療時の変化が予後を反映し得るものか検討を行った。

【方法】1987年から1996年まで当科で治療を行った上皮性卵巣癌のうち, 他施設での既治療例, 重複癌症例, 他病死例, CA125測定不十分例を除いた58例(漿液性腺癌30例, 粘液性腺癌11例, 明細胞腺癌10例, 類内膜腺癌5例, 未分化癌2例)を対象とした。CA125の測定は治療前, そして治療後は1ヶ月毎を原則とした。CA125の測定値は絶対値と例数の間で正規分布を示さず, 常用対数値化することにより正規分布を示したため測定値の常用対数値をもって統計処理をおこなった。

【成績】臨床進行期はI期20例, II期7例, III期2例, IV期6例あった。年齢は23才から85才で平均50.5才であった。生存例は42例, 原病死例が16例あり, 病歴期間は5ヶ月から51ヶ月であった。CA125対数平均値は治療前及び治療後1, 2, 3, 6, 12, 24ヶ月すべての時期で, 生存群42例(2.54, 1.91, 1.44, 1.27, 1.05, 0.99, 1.11)は死亡群16例(3.06, 2.52, 2.06, 1.82, 2.06, 2.72, 3.02)に比べ有意に低値を示した( $P < 0.01$ )。また生存群では治療後1ヶ月及び2ヶ月のCA125対数平均値は根治術先行例(2.65, 2.167)は術前化学療法例(1.74, 1.26)に比べ有意に低値を示した( $P < 0.02$ )。一方死亡例でのCA125対数平均値はすべての時期において根治術先行例と術前化学療法例との間に有意差を認めなかった。

【結論】CA125測定値の常用対数化により臨床的予後を推察する上で有用であることが示唆された。